

科目間相互連携による学生交流の試み

矢野 洋子^{*1}・植村 和彦^{*2}

^{*1}九州女子短期大学子ども健康学科

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

^{*2}西日本短期大学保育学科

福岡市中央区福浜1-3-1 (〒810-0066)

(2011年5月31日受付、2011年7月15日受理)

要 旨

筆者らは保育士養成短期大学のカリキュラムにおいて、それぞれ「障がい児保育・教育」と「幼児教育における音楽表現」をテーマに授業を開講していた。「障がい児保育・教育」に関しては月に1回障がいを持つ子ども達との余暇活動を学生の企画運営のもとに行い、「幼児教育における音楽表現」に関しては音楽表現活動であるコンサートの開催や音楽劇などの発表を行ってきた。12月の障がいを持つ子どもたちとの余暇活動においては毎年「クリスマスコンサート」を開催し、それぞれのゼミ活動の相互連携を行ってきた。本稿においてはその活動について紹介するとともに、それぞれの専門分野の相互交流を行うことで学生の学びについて学生からの意見や感想をもとに検討した。その結果、学生間の情報交換の難しさや障がいの特性を考慮しつつ行うことはそれぞれのゼミの立場から難しい部分が多くあったことが明らかになったが、その経験が学生が就職後も実際の保育現場等において糧となっていることが明らかとなった。

キーワード：障がいを持った子どもの余暇活動 音楽表現 科目間交流

1. はじめに

保育者や教育者を目指す学生は、厚生労働省や文部科学省が指定した様々な科目を履修しなければならない。その内容は保育や教育に必要な内容が多岐にわたっている。その中で2年次通年科目「総合演習」は、各教員がそれぞれの専門分野を生かして授業を行うゼミナール形式で開講されるものである。1年次後期に学生に対して希望調査を実施し、教員との面談を経て所属するゼミナールが決定するが、ここでは個々の学生の興味・関心に応じて研究テーマが設定され、学生の希望が尊重されるようになっているため、既存のクラスの枠を越えてメンバーが構成されることになる。そのため学生と教員の間、また学生同士の間での集団としての協調性を養うことが重要な課題となる。またそれぞれの専門的な教育がなされより学びを深めていくことができる。

筆者らはこの「総合演習」において、それぞれ「障がい児保育・教育」と「幼児教育における音楽表現」をテーマに授業を開講していたが、本稿ではこの二つのゼミナールの相互連携による取り組みとして毎年開催してきた「クリスマスコンサート」についての実践報告を行うとともに、両ゼミナールの学生同士が交流しながら活動し、学ぶことによって得られる教育的効果やその可能性について考察したいと思う。

II. 各ゼミナールの活動について

(1) 矢野ゼミナール「障がい児保育・教育」

矢野が担当するゼミナールの活動は、「障がい児保育・教育の実践的活動」である。この活動に関しては、これまでに報告を行ってきたが障がいを持つ子どもたちの保護者が余暇活動のグループ「フルーツバスケット」を立ち上げ月に1回の余暇活動を行ってきた。その活動のボランティアを依頼されたことから、平成20年度より学生が活動の企画・運営を行い月に1回の活動を行ってきた。

活動は基本的に土曜日の午後2時間程度行っている。主な活動内容は、「クッキング」「水遊び」「バスハイク（動物園など）」「リズム遊び」「公園で遊ぼう」など季節や子どもたちの興味に応じて考えている。2時間の活動は基本的に以下のプログラムで行われている。

<プログラム>

14:00	始まりの会	出欠確認と活動の説明をリズム室で行なう。
14:10	主活動	
15:10	おやつ	演習室をおやつ部屋とする。
15:40	副活動（音楽・絵本など）	リズム室に移動する。
15:55	終わりの会	今日の活動を振り返ってさよならをする。

<2008年度活動例>

4月「お花を植えよう」	7・8月「プールで遊ぼう」
5月「動物園へ行こう」	9月「パフェを作ろう」
6月「体育館で遊ぼう」	10月「大濠公園で遊ぼう」
11月「ドライブに行こう」	12月「クリスマスコンサート」

プログラムについては、月ごとにプログラム担当者を2名決めその案を元に詳細に検討をした。しかし活動内容はあくまでも主な活動であり、嫌がる子どもへは無理に強要はせずに個別の活動を行なうこともある。また対応に難しいと感じたケースについてはケースの検討を行い次の活動において環境の調整を試みた。プログラムやケース検討などは週1回のゼミ

の時間の中で行なったが、必要に応じてゼミの時間以外でも集まることもある。活動は、あくまでも子どもの心に寄り添う支援を求めて行っているが1年を通じて学生たちと子どもたちとの信頼関係が構築でき、実践から学ぶべきことは本当に多いと学生ともども感じている。

そのような試みの中で、12月は活動の中で毎年植村ゼミの協力のもとに「クリスマスコンサート」を開催してもらい、子ども達や保護者も楽しみとしているイベントである。

(2) 音楽表現ゼミナールの概要

保育士養成短期大学のカリキュラムにおいて音楽系科目を担当する筆者（植村）は、2年次通年科目「総合演習」（ゼミナール）において、特に音楽に興味や関心があり、楽器を演奏することや歌を歌うことが好きな学生たちと共に音楽表現の演習を実践してきた。この音楽表現ゼミナールでは、本学を会場として開催された「地域ふれあい祭り」（5月）でのステージ出演や本学近隣の宅老所での「七夕コンサート」（7月）、大圓寺（福岡市中央区）本堂で開催された「納涼コンサート」（7月）や福岡中央特別支援学校青年学級における成人式での「お祝いコンサート」（1月）など、年間を通して積極的に学外の近隣地域の方々と、音楽を通して交流を深めながら、豊かな表現力の可能性や仲間との協調性の大切さなどを体験的に学んできた。そして、その活動の集大成として、毎年卒業を控えた2～3月の時期に地域公開の「ふれあいコンサート」を開催してきた。平成19年度に始まったこの「ふれあいコンサート」は、従来は教育・学習方法改善支援取組企画（平成19年度～21年度）として開催していたが、それが恒例化しているものである。

このような年間の活動の中で、本稿において焦点をあてる、障がいを持つ子どもたちのための「クリスマスコンサート」は、歴代の学生たちの中でも特に強く印象に残っている取り組みであるように思われる。

III. 「クリスマスコンサート」について

(1) 「クリスマスコンサート」の目的

このコンサートは、「総合演習」において「障がい児保育・教育の重要性」をテーマに研究活動を展開していた矢野ゼミナールと、「保育・幼児教育における音楽表現」をテーマに活動していた植村ゼミナールとの相互連携によって企画・準備される取り組みであり、矢野ゼミナールが企画・運営を行っていた「障がい児の余暇を考える会 ～フルーツバスケット～」の月1回の活動計画の中に組み込まれ、平成19年度より例年12月の中旬に開催してきたものである。土曜日や祝日に短期大学キャンパスに障がいを持つ子どもたちとその保護者を招待し、約30分間のコンサートを開催して休日余暇を楽しく過ごしてもらおうと同時に、音楽を通して交流を深めることを目的としている。

(2) 実践への準備と内容について

矢野ゼミナール・植村ゼミナールでは、後期授業の開始と同時にこのコンサートに向けて始動し、ゼミナール間での連携を図りながら、構成や選曲の検討、演奏や振付の担当までのほとんどを学生主体で取り組んできた。担当教員である筆者（植村）は必要に応じて助言者として関わりつつ、場合によっては学生と一緒に演奏にも参加した。

コンサートを提供する側である植村ゼミの視点としては、コンサートは聴き手がいて成立するものであり、通常の音楽ゼミナールの活動でも各自の意見を出し合い、候補曲を挙げながら選曲していくが、この取り組みでは聴き手となる子どもたちの性格や各自の好みなどを把握している矢野ゼミナールの学生たちからの意見交換の中で、あらかじめ助言や新たな提案を得ることによって、当初検討していた曲目を変更することも柔軟に行った。また「ドレミのうた」のように、フルーツバスケットの子どもたちが大好きな曲であるために是非プログラムに入れて欲しいという要望から、毎回選曲してきた作品もある。約30分間のコンサートを通して、子どもたちに楽しい時間を過ごしてもらえるように「ミッキーマウスマーチ」や「星に願いを」などのディズニー映画の名曲やポップス作品などを中心とした選曲を心掛けていた。以下に、このコンサートにおいて選曲した主な作品について列挙する。(表1)

表1 クリスマスコンサートにおける主な曲目

合唱（振付）	『サンタが町にやってくる』、『赤鼻のトナカイ』、『ホールニューワールド』、『あわてんぼうのサンタクロース』、『きよしこの夜』、『荒野のはてに』、『星に願いを』、『おおかみなんてこわくない』、『ミッキーマウスマーチ』、『小さな世界』、『アンパンマンマーチ』、『人間っていいな』、『ベストフレンド』、『夜空ノムコウ』、『ドレミのうた』 等
器楽合奏 ミュージックベル	『サンタが町にやってくる』、『あわてんぼうのサンタクロース』、『きよしこの夜』、『ホールニューワールド』、『ドレミのうた』 等

コンサートでは合唱だけでなく歌に合わせた振付などの身体表現を取り入れることも多かったが、激しく身体を動かす表現や、舞台上で強く音をたててステップを踏むことで、子どもたちを驚かせてしまう可能性があることについても矢野ゼミ側から助言を得たことで、振付について再検討し改善を試みた。

また器楽合奏やミュージックベルの演奏を組み込むことについては、ゼミ間の意見交換においてウィンドチャイムやミュージックベルなど、光沢のあるような楽器などには特に子どもたちが興味を示すため、開演前のセッティングから演奏中～演奏後までの間どのようにしてこれらの楽器を取り扱うかということについてもゼミナール間で繰り返し打ち合わせが行われた。実際のところ、子どもたちが各種鍵盤楽器やマラカスなどの打楽器などに強い興味

や好奇心を抱くのは当然のことであるが、本番中に関しては演奏に集中して楽しんでもらえるように、演奏者側があらかじめ配慮すべきことの大切さを学生たちも実感したのではないかと思う。

平成19年度（初回）のコンサートでは、学生たちが手作りした紙コップマラカスを子どもたちに配って、学生たちの演奏する「赤鼻のトナカイ」や「サンタが町にやってくる」などの曲に合わせて、音を鳴らして自由に参加してもらう場面もあった。一緒に来校していた兄弟児たちにも小さな打楽器を持って同時に参加してもらうことで、演奏者と子どもたちの間の距離はさらに縮まったようであった。

毎回コンサートに出演する学生たちは全員サンタやトナカイの衣装を身につけ、時にはパネルシアターなどを用いて視覚的にも楽しんでもらえるよう工夫した。以下にコンサート当日の様子を写真にて紹介する。（写真①～写真⑥）



写真① 歌に合わせた創作ダンス



写真② 合奏『サンタが町にやってくる』



写真③ ミュージックベルの演奏



写真④ ピアノ伴奏も学生で分担



写真⑤ 楽しそうに参加してくれた子どもたち



写真⑥ 終演後に全員で記念撮影

事前のリハーサルの中で全体の進行に関して矢野ゼミナールから、「曲間での口頭による解説・作品紹介などは極力減らして、テンポ良くプログラムを進めた方が良い」という意見も出された。これも、子どもたちの集中力や音楽に対する反応がどのようなものであるかを把握しているからこそ言えることであろう。

一方矢野ゼミナールの学生は、このコンサートの聴き手である子どもたちの代弁者として子どもたちの好みや、特別な配慮を要する内容について説明することでより子どもたちが楽しめるような内容となるように、物的な環境整備を含めての打ち合わせを行った。たとえば舞台と客席の位置関係であるが、21年度は近すぎて大きな動きに対しては威圧感を感じるようなことがあったため、22年度は舞台との間隔を広く取った。しかし今度は距離が遠すぎ、子どもたちが舞台の前で他の遊びを展開してしまうこともあった。

しかし、このような意見交換が比較的活発に行われた年度もあれば、なかなかゼミナール間での情報伝達が進まず、計画的に準備が進められなかった年度もあったことは確かである。有意義で建設的な意見交換のためには、前提として各ゼミナールにおいて自分たちの方針や要望が明確化していることが大切だが、その点が不明瞭な状態であったり、ゼミナール内のチームワークが崩れるようなことがあったりすると、他のゼミナールと連携を取ろうとしてもかえって混乱を招くことにもなり日頃に構築してきた各ゼミナールのチームワークが試される一面も持っていた。また何よりも「専門性の違い」を感じるものが学生間であり、ゼミナール間の話し合いで激論になったこともあった。「音楽」をより専門的に完成したものとして届けたい植村ゼミと、完成度よりも子どもたちの興味や気持ちに寄り添いたいと思う矢野ゼミの学生間には打ち合わせの段階ですれ違うこともあったようである。

しかし毎年この取り組みを通して両ゼミナールの学生たちは、謙虚な姿勢で周囲の意見に耳を傾けることと、自分たちの専門性に自信を持って忍耐強く努力することからお互いの専門性の融合が可能となり、子ども達が楽しむ姿が何よりも大切であることを感じ取ってくれたのではないかと感じている。

(3) 参加学生（卒業生）の感想

この取り組みに参加・出演した卒業生の中から、植村ゼミのリーダー（ゼミ長）を務めていた3名（平成20年度～平成22年度）、矢野ゼミでは卒業後も活動に関わってきている2名（平成20年度・21年度）に対し以下の4項目に沿って感想の提出を依頼し、回答を得ることができたので、表2・表3において紹介する。

- ① 「選曲や構成の面で特に心がけたこと」
- ② 「企画・準備を行う中で特に大変だったこと」
- ③ 「実際に子どもたちと保護者の方々の前で演奏して（演奏を聴いて）特に印象に残っていること」
- ④ 「このコンサートでの経験が就職後の現在の自分にどのように生かされていると思うか」

表2 植村ゼミ卒業生の感想（各年度のリーダー）

	Aさん（平成20年度卒業） 福岡市内保育園勤務3年目	Bさん（平成21年度卒業） 福岡市内幼稚園勤務2年目	Cさん（平成22年度卒業） 前原市内幼稚園勤務1年目
①	「フルーツバスケット」に参加する子どもたちが希望する曲はもちろんのこと、歌うこと以外のパフォーマンスを取り入れやすい曲も選びました。楽器で演奏したり、劇風に歌ったりと様々な要素を取り入れることで、少しでも興味のあるものに触れ、心から楽しんでもらえるように心がけました。	皆さんがよく知っているであろう曲を選ぶように心がけました。また、障がいを持つ子どもたちを驚かせてしまうようなことがないような環境作りにも気を配りました。	子どもたちを対象にして、彼らに喜んでもらえるように選曲しました。また、歌に合わせた振り付けでは、メンバーで担当曲を分担して1曲1曲を創り上げられるように心がけました。
②	大変だったことは練習時間の確保です。暗譜、音程の確認、振り付け、演出などを何曲分もするとすると覚えることが大変で、覚えてなお気持ちに余裕が無いと、メンバーの笑顔もなかなか出てきませんでした。他の授業や課題もある中での練習は思うように進まず大変でした。	子どもたちの行動について予測できない部分もあったので、ゼミナール間での打ち合わせをもっと綿密にやっておくべきだったと思います。	ただ歌うだけの演奏ではなく、「聴かせる音楽」を創り上げることが大変でした。声楽の先生にもご指導をお願いするなど、多くの方々力を借りて完成したクリスマスコンサートでした。
③	様々な楽器を取り入れたことで、そこに興味を持った子どもたちがどんどんステージに上がってきてくれて、一緒に演奏したり踊ったり、指揮の真似をしてくれたりもしました。普段のステージ発表では体験しなかったことなので、子どもたちと一体型の演奏会を開くことができてとても楽しかったです。また、保護者の方々も「子どもたちのこんな姿は初めて見ました」と言ってくれたので、私たちの音楽で何か子どもたちの心に響くものをお届けできたのかなと思うと、思わず私たちの方が感動してしまいました。	すごく楽しそうに聴いてくれて安心しました。色々な音やリズムに対して、子どもたちが強く興味を示しているのがとても伝わってきました。	練習の時からメンバーの間でも笑顔は心がけていたものの、なかなか自然な笑顔が出せずにいました。しかし、本番で子どもたちを前にした時、驚くほど自然に笑顔が出てきて、練習の時よりも明るい表情の合唱になりました。また、私たちを見ながら一生懸命に歌ってくれる子どもたちの姿を見て、とても愛おしく感じ、「早く先生になりたいね」とメンバー同士で話をしていました。

④	<p>常に先生方に言われていたことは「活動や練習に自分のプライベートな感情を持ち込まないこと」でした。当時は何となくでしか意味がわからなかったのですが、学生の頃の「自分のため」の毎日から、保育士という立場での「子どものため」の毎日に移行して、やっとその意味がわかりました。私たちが毎日取り組むことの先に待っているのは子どもたちで、歌や踊りや楽器の演奏などの「表現する」という行為には常に感情が伴いました。私たちの感情がマイナスだとすぐに表面に現れ、楽しくないステージが出来上がってしまい、かわいそうなのは楽しみに待っていてくれた子どもたちでした。それが分かるようになった今は、どんなに落ち込むようなことがあっても、必ず良い感情だけを持って子どもたちの前に立つように心がけています。まだまだ未熟で完璧に演じることは出来ませんが、きっと保育士になった全員が感じていることだと思います。</p>	<p>コンサートを通して実際に子どもたちと交流することで、子どもたちの持つ障がいに対する関心がとても深まりました。自分たちの歌や演奏を聴いてとても喜んでくれたことは、今後忘れることのできない貴重な経験であったと思います。</p>	<p>このクリスマスコンサートのことだけではなく、1年間のゼミ活動を通しての経験が幼稚園でとても生かされています。短大入学時と比べると楽譜を読むのも苦ではなくなったし、ゼミ活動の中で触れた数多くの曲を子どもたちに教えることも出来るので、音楽表現のゼミナルを選択して本当に良かったと感じています。これからは幼稚園でマーチングも始まるので、ゼミのふれあいコンサートで取り組んだマーチングのフォーメーションやリズムも参考にしていきたいと思っています。</p>
---	--	--	--

表3 矢野ゼミ卒業生の感想

	Dさん（平成20年度卒業） 福岡市内保育園勤務3年目	Eさん（平成21年度卒業） 福岡市内障がい福祉サービス事業所勤務2年目
①	<p>選曲については覚えていないので分からないが、子どもたち(特に兄弟児)の年齢が上がってきており、毎年ほぼ同じ選曲のため、つまらなそうにして座り込む姿がよく見られた。年齢に合わせて選曲したり、また、子どもたちに好きな音楽を聞いてみてはどうか？</p>	<p>子どもたちの好きな、又は、好きそうな歌を取り入れて貰った。後は音楽ゼミに任せました。</p>
②	<p>互いのゼミの就職活動も重なり、全員揃っての打ち合わせがたくさん出来なかった。そのため、矢野ゼミ側と音楽ゼミ側の意見がたまに合わないこともあった。練習の様子・雰囲気は矢野ゼミで観に行ったが、「こうした方が良い」などの意見を思いつくほど、私たちが分かってなかったと思う。</p>	<p>他のゼミとの話し合い(ここを気をつけて欲しいと思って伝えても、あまり伝わってなかったよう) (例：ハンドベルの配置など) どんな事が好きで、こんな事をしてしまう、気になるなどの子どもたちの情報を上手く伝えていなかった事が原因。子どもたちに楽しんで貰おうと衣装やプレゼントを揃えて、みんなで練習や打ち合わせをしていく事。全員が流れを把握する事。</p>
③	<p>楽器をそばに置いていたため、子どもたちも実際に楽器を触って楽しんでたこと。ただ、ハンドベルを使用した後、子どもたちの手に取れる所に置いてあったため、そっちに興味がいき遊んでしまうこともある。</p>	<p>子どもたちが衣装や歌に釘付けになっている眼差し。</p>
④	<p>「子どもの歌を知る」と言うことでは、知らない歌もあったし、役に立ったと思う。また、子ども達は、自分が興味があるものには楽しんでくれ、素直なりアクションしてくれるので、保育園で、自分が前に立つ時にも、それを実感した。</p>	<p>好きな物、楽しそうな物には気を惹かれる事、だからその子の好きな活動を知って誘ってみたり、一緒に楽しめたりする事が大切だと感じている。</p>

IV. おわりに

先に述べたように、この「クリスマスコンサート」においては企画・準備から実践に至るまで、あくまでも学生主体で取り組んできた。音楽ゼミナールとしては、選曲作業後に全員がいずれかの曲の練習担当グループに所属し、その曲の練習から振付の考案、指導まで中心的立場で貢献してもらった。様々な曲を練習していく中で、学生同士が互いに議論し合いながらよりよい演奏にしていこうという試みが、集団で一つのを創り上げる上で欠かせない協調性や積極性、自発性やリーダーシップ、課題解決能力、そして継続的に努力することの大切さを強く実感する機会となっていることは筆者（植村）から見ても明らかであった。

また矢野ゼミナールにとっては、月に1回の活動を通して子ども達を理解し信頼関係を構築してきた中から子どもたちの個性や好みを他の学生に伝えることにより、それまでの子ども達との関係性の再確認ができるよい機会であった。わずか月に1回の活動であるが、いかに子ども達が楽しんでくれるかという視点で、配慮の必要性やその内容を伝えていく難しさや重要性を体感して「子どもたちの理解者」である役割の重みとやりがいを感じた学生は多かったと感じている。

今回報告したように、異なるテーマのもとに研究活動を行う学生たちが連携して共通の目標を見出し、それぞれの得意分野を生かしつつ、意見交換を重ねながら一つの企画を成功させることは、普段の講義の中ではなかなか実感出来ない非常に有意義な体験であると言える。活動の中では、お互いの専門性の違いから生まれる意見の相違や、意識のずれ違いもしばしば見られたが、これも社会人として欠かせないコミュニケーション能力を養う上で貴重な経験であることは言うまでもない。今回のように両ゼミナールの学生が、取り組みを進める上で互いに譲れない大切なポイントについて考察し合うことによって、ゼミナール単独での活動時には意識することのなかった新たな発見が双方に生まれていたことは確かである。このことが実現出来たのは、たとえお互いの専門性が異なっても、「いかにして、子どもたちに喜んでもらえる企画を創り上げるか」という共通の目標のもとで力を合わせて取り組んだからこそである。

一つ感じるのはこのクリスマスコンサートに関わった学生全員が、この取組を通して「予想外の体験」をしているであろうということである。障がいを持つ子どもたちと毎月顔を合わせて、マンツーマンで向き合ってきた矢野ゼミナールの学生にとっても、このコンサートを通して初めて見る子どもたちの表情や反応があったはずである。また、一生懸命練習して本番で演奏を披露した音楽ゼミナールの学生たちも、自分たちの表現する音楽に対する子どもたちのダイレクトな反応の全てが新鮮であったに違いない。こうしたことを、コンサートに関わった両ゼミナールの学生全員が共感し得ることこそ、今回のような連携による形式をとることの大きな意義であると感じる。

保育や教育という分野は、「音楽」や「造形」、「発達心理学」や「障がい児保育」などの

それぞれの専門性が単独に存在しているものではない。様々な専門性を相互に取り入れ影響しあいながら展開していくことによって成り立っている。このような科目間交流は、それぞれの学生が、短大での学びは断片的なものではなく、保育・教育への大きな集大成へとつながっていくことを体感することのできる有効な手段であると言える。

そしてこの経験からそれぞれの専門性の違いはあるが、何よりも子どもたちの気持ちに寄り添い共感していくことから様々な専門性が活かされていくことを今後忘れずにそれぞれの現場での活躍の柱としてほしいと願っている。

参考文献

- 1) 矢野洋子、障がい児の余暇活動実践プログラムへの取り組み… (I)、西日本短期大学保育学科研究論集、2(2008)37-51
- 2) 矢野洋子、障がい児の余暇活動実践プログラムへの取り組み… (II)、西日本短期大学保育学科研究論集、3(2009)29-35
- 3) 矢野洋子、障がい児の余暇活動実践プログラムへの取り組み… (III)、西日本短期大学総合学術研究論集、1(2011)91-99
- 4) 植村和彦、出前コンサートによる地域住民との交流、西日本短期大学保育学科研究論集、2(2008)53-60
- 5) 植村和彦、音楽を通しての子どもたちとの出会い、西日本短期大学総合学術研究論集、1(2011)121-126

Attempt of student exchange by the mutual cooperation between subjects

Yoko YANO^{*1}, Kazuhiko UEMURA^{*2}

^{*1}Department of Childhood Care and Education, Kyushu Women's Junior College
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

^{*2}Department of Childhood Education, Nishi-Nippon Junior College
1-3-1 Fukuhama Chuouku Fukuoka-shi, 810-0066, Japan

Abstract

The authors had begun a class respectively in the theme in “the obstacle child care and the education” and “the music expression about the child education” in the curriculum in the child care man training-up junior college.

of the activity of the hosting of the concert to do leisure activity with the children who have an obstacle once to the moon about “the obstacle child care and the education” under planning management of the student and to be music artistic activities about “the music expression about the child education” and the music drama and so on

It went.

To have an obstacle in December, too, did “the Christmas concert” every year about the leisure activity with the standing and did each mutual seminar way cooperation.

It reviewed based on the opinion and the comment from the student about the learning of a student in introducing about the activity at this article and doing the intercommunication of each specialized field.

As a result, a lot of difficult parts lay in doing while considering the difficulty of the communication among the students and the characteristic of the obstacle from the view point of each seminar.

However, that the student placed in the actual child care scene and so on after getting a job, too, and that the experience became bread became clear.

key words: Leisure activity of the child who has an obstacle / Music expression / Alternating current among the subjects